
律儀な死神

百倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

律儀な死神

【Nコード】

N8183D

【作者名】

百倉

【あらすじ】

死神の存在が常識化した時代。死者の魂を導く死神は、死を恐れている人間から忌嫌われていた。死神は孤独だった。しかし、誰もが必死に生きている中、ある病気の少女は言った。「私、早く死にたいの。」そんな少女と死神が過ごした、一週間の物語。

1＊死神と少女＊（前書き）

長編です。死神については私自身、曖昧なところがあるので、そこは脳内でアドリブつけてます。物語の中では穏やかな、ゆっくりとした時間が流れているので、ゆったり読んでください。

1＊死神と少女＊

死神。

生命の死をつかさどる神。

人間の肉体から離れた迷える魂を冥府へ導くために存在している。

死神を見たというものが近いうちに死んでしまうというのも、そのためだ。

それゆえか不吉の象徴とも言われ、悪い存在のように言われている。「死神を見た者は必ず死ぬ」と、いつしか悪い意味で言われるようになった。

人々は死神に怯え、毛嫌いし、死神除けまで作って追い払おうとした。

死神もそんな人間の仕打ちに負けてばかりもいられず、やむなく無理矢理命をとらなければならないこともあった。

そんな時代に、病気に臥^ふせる一人の少女と、孤独な死神が出会った。

1＊死神と少女＊

コンクリートジャングルの上を、一つの黒い塊が飛んでいる。
黒いローブを着て手に巨大な鎌を持ち、頭からすっぽりフードを被っている。

背中には悪魔のような黒い羽が生え、風を捕まえて飛んでいく。
それは、いわずと知れた死神そのものだった。

「さて…今日はあそこだな…」

死神は急降下し、街外れの野原にある病院に降り立った。大きな木が病院の庭に植えられ、周りが豊かな緑に囲まれた環境の良いこの病院は、隔離患者ばかりが収容されている。うららかな春の日差しが、美しい風景を創り出しているこの病院で、もうすぐ死ぬ人間がいる。

事前に知らされている情報を元にその人間を探して、死ぬまでのあいだ見守ることが仕事だ。

「あの娘…だな。難病を患い、一週間後の午後0時に死亡…家族にもとても大切にされているため反発率70%…か。また面倒なことになりそう…だな」

死神は大きな木の上に座り、頭からすっぽり被っていたローブのフードを取った。その顔は、辞典に載っているような髑髏^{どくろ}ではなく、人間の男の顔だった。瞳はどこか寂しげな、不思議な光を放っている。そして、やる気なさげに頭をかきながら事前に知らされている情報と少女を交互に見た。長い黒髪、病気でやせ細った身体、整った顔立ち…だが、顔色が悪く、頬が少しこけている。いかにも病人といった感じだが、どこか気品のある少女だった。情報の中には「良家の一人娘」とあった。

少女を見ながら、死神は独り言をこぼした。

「はあ…家族に大切にされている良家の…お嬢様かあ。こりゃまた面倒な…ことになりそうだな。一般人にオレは見えないけど…最近人間も死神の存在を認めるようになって…ち…っとは仕事はや

りやすいかな。って思ったら逆だし…この前は酷かったなあ…除霊師とか雇っちゃって…ちゃんと挨拶したのにオレ消されかけたもんなあ…今回は大丈夫かな…良家って言うくらい…だから、多分凄く奴を呼んだりするかも…あー嫌だー…」

静寂と闇に包まれたような見た目からは想像できないほどの嫌味をこぼした死神の心の内は、人間の理解の無さに対する不満だらけだった。それでも死神は人間が死んだとき、その者の魂が迷わないよう導かなければならない。追い払われても消されかけても、この宿命からは逃れられない。嫌でもむしる感謝の心を持って、喜んで取り組まなければならぬ。最高の神様の命により任された、名誉ある使命なのだから。

と、死神はいつも思うことにしていた。

「ま、見つからないようにしてれば良いだけだし…どうせ病気で動けないだろうしな…一週間経つまで、この木の上で寝てよ…zzzz…」

動かずにいれば気づかれることもないから、このまま時間が過ぎるのを待とう。死神はそう気長に考えて、見つからないよう庭の大きな木の枝に身体を預けて眠りについた。

数分後、誰かに呼ばれているような気がして、目を開けた。

「ん…？何か聴こえる…」

死神は目を擦りつつ、上体を起こした。

「あ、起きた。ねえ、あなた」

「…？」

「そんなところで寝てると、風邪ひくよ？」

「…！！」

木の下ですつと死神を呼んでいたのは、一週間後に死ぬ予定の、あの少女だった。

死神は吃驚してバランスを崩し、木から滑り落ちた。何が起こったのか全く把握できない。ただ、「見つかってしまった」ということだけは確かだった。

落ちたとき不覚にも、地面に後頭部をぶつけてしまったせいであまりがした。

ぶつけた後頭部に手で撫でると、痛みがある部分にコブができていた。

「いつてえ…死神なのに…コブが」

「大丈夫…？私の部屋においで？手当てしてあげるから」

「はあ…？」

死神は落ちたときのショックと少女の突然の登場で混乱していた。後頭部をさすりつつ、言われるまま少女の病室へお邪魔することになってしまった。

「よし、これでもう大丈夫」

「どうも…一応、礼は…言っておく。ありが…とう」

「あなた、死神さん？」

「まあ…な」

「けど、本当に死神なの？顔は人間の男の人なのに…鎌持ってるけど…羽が生えてて…どっちかっていうと悪魔みたい」

「キリスト教では死をつかさどるのは…死神じゃなくて天使だから…でもオレは死神だし…混ざってるというか…」

「へえ…じゃあ、キリスト教では、死神＝悪魔ってこと？」

「うーん…キリスト教では死神の代わりが悪魔というふうにいわれている…というほうが正しいか…でもオレは死神だし…いろいろ影響受けてこうなっていると…いうか…（って何普通に会話してんだ…

オレは)」

「なるほど…よく分からないけど分かった」

「どっちなんだ…」

少女の質問に答えつつも、頭の中は混乱したままだった。死神にはこの少女が不思議に思えて仕方がなかった。今まで見てきた人間といえど、死ぬことを恐れて自分を消そうとするくらい暴れ、必死に生にしがみ付いている者ばかりだったのに。人間の反応としてはそれが普通とも言えるのだが、この少女は暴れるどころか、むしろ自分を歓迎しているように見える。

「なあ…お前はオレが目の前にいて、怖くない…のか？」

「どうして？」

「どうしてって…知らない…のか？死神は…お前ら人間の魂を導くために、近いうち死ぬ人間の前に現れると…いうことを」

「うん、知ってる。今の世の中、死神様ほど身近な神様はいないから」

「なら、どうしてオレが怖く…ないんだ？今の人間はオレたちの存在を恐れている…のに」

少女は軽く深呼吸して、死神を見た。そして、はつきりと言った。

「私、早く死にたいの」

「は…？」

そう答えた少女の目は、とても綺麗に澄んでいた。

死神は拍子抜けした。この時代の中で、こんなに簡単に死にたいと言った人間は初めてだった。

そして、これほど素直に死を受け入れている人間を見たのも初めてだった。少女の言葉が信じられず、死神は思わず問いかけた。

「なぜ…？」

「ふふ…死神でも、分からないことがあるんだね」

「当たり前だろう…？まあ…本当は知らない方が…良いんだが」

「さつきは聞いたのに？」

「それは…お前があまりに不思議なことを言う…から」

「そうなの？やっぱり、死にたいなんて思うのは変？」

「まあ…お前にはもうこの世での時間がないから…やりたいことがあってもすぐに達成出来ないようなことであればあきらめるしかない…けれどな…。普通は…今までオレが見てきた人間は…やりたいことをやってから死にたい、それまで待つてくれ…と懇願していたもの…だが」

「そうなんだ…けど、私は本当に何時死んでもいいの。一秒後でもいい。死神さん、あなたなら出来るんじゃない？」

「出来ないことはない…が、よほどのことがない限りそれは…許されないんだ。寿命も人間次第で変わるが…死が迫ったとき、死神に守られている人間は…死ぬと決まった期日より遅くても早くても…いけない。人間は与えられた使命をこの世の人生の中で達成し、それまでの間しっかりと生きる義務がある。遅かれ早かれその使命を達成することが出来る可能性があるなら、たとえ寿命が見えていても…だ。死神はその様子を最期まで見守る…それだけだ」

「そっかあ…それで死んだら連れて行くんだね」

「そう…だ。死せる魂がこの世で迷わぬように…な」

「・・・」

少女は少し間を置いて、死神に言った。

「ねえ、せっかくだから、あなたの名前教えて？」

少女の言葉に死神はまた驚いた。人間に名前を聞かれたことも初めてだった。最も、まだ生きている人間と会話をしてはいけないのだが。しかし、死神に名前を聞く少女の真意が全く読めない。

「…？名前なんて聞いて…どうする？」

「覚えておきたいの。ねえ、教えて？」

死神は躊躇いつつもはつきりと言った。

「・・・arc^{アルカナム}anumだ。ラテン語で秘密、神秘を…現す」

「良い名前…」

「そうか…？」

死神は少し照れた。誰かに名前を名乗るのは初めてだったが、褒められたのも初めてだった。

気恥ずかしいような、どこか懐かしい妙な感情に見舞われた。照れくさいような気持ちを押し込め、死神は少女に言った。

「お前は不思議な…面白い奴…だな。オレをみて怖がりも…しない。むしろ知ろうとしていろいろ…聞いてくる」

「顔が人間だからっていうのもあるよ。けどそれだけじゃない…あなたが今までどんな人を見てきたのか分からないけど…私はあなたのこと、知りたいって思う。だから、お話ししてるの」

「そう…か。それは、オレの顔が人間でなくても…か？」

「当たり前だよ。本に載ってるようなガイコツでも、悪魔みたいな獣でも平気…」

「そう…か」

「それにね、一人で居るより相手が誰でも…話し相手が欲しかったから…」

「お前はは死にたいと言う…のに、一人が怖い…のか？」

「そうよ…この部屋で一人していると、孤独に潰されそうだから…」

「そう…か。やはりお前は面白い…奴だな」

「ふふっ…それにしてもあなたって…特徴的な喋り方をするね。ゆっくりで優しくって…聞いてると、妙に気持ちが落ち着く…」

「…娘？」

少女は、静かに目を閉じて、寝息をたてていた。

「オレの前でこんなに安らかに眠った人間は初めて…だな」

死神は少女の寝顔を見ながら独り言をこぼし、暮れかけている太陽

を窓越しに見た。

少女が目を覚ましたのは、それから何時間も経ったあとだった。

「……ん？……ああ、随分寝ちゃった。夕食の時間もとくに過ぎちゃって……あー……」

叫びながら窓の外を見るともう太陽の姿はなく、月が優しく病院の庭を青白く照らしている。ベッドに付けられているライトをつけて周りをみると、ラップを駆けられた夕食と手紙が置いてあった。手紙は、寝ている間に様子を見に来た両親だった。手紙にはこう書かれていた。

「疲れて眠っているようだから帰ります。今日は何か楽しいことでもあったのかしら？夕食は目が覚めたら早めに食べなさいね。明日も同じ時間に来ます。どんなことがあったのか、体調がよければ聞かせてね。母より」

手紙を読み終え、置かれている夕食を見た。

とりあえず空腹を満たそうと、ラップをはずして冷めてしまった夕食を食べ始めた。

薄暗い部屋で一人していると、いつも寂しくなってくる。こんなとき誰か話し相手がいたら、冷めた夕食ももう少しおいしく食べられるかもしれない。

「ふう…昼間の死神さん、いなくなっちゃったのかな…」

少女は昼間のことをはつきりと覚えていた。あんなに楽しい時間は少女にとって久々のことだった。こみ上げてくる寂しさを紛らすかのように、味気ない夕食を口に押し込めていると、何か室内に気配を感じた。

ゆっくりと見回し、やがて窓際に意識が集中する。

じっと見ていると、なにやら部屋の隅に黒い塊が動いているのが目に止まった。

それは羽毛のようにわさわさとしていて、見た目よりも軽そうに揺れている。

少女は目を凝らして、その一角を凝視した。少女には、それが何なのか分かっていた。

「なん…だ？窓の外に何か…いるのか？」

「…！」

「今日は月が出ている…から、夜でも明るい…。そこに何が居るのかよく…見える。…何が…いたんだ？」

「…何も。窓の外で何かが動いたように見えただけ」

それは、昼間に聴いたあの死神の声だった。少女は返答しながらベツトからゆっくりと出て、窓際まで歩いていった。死神は夕食が残ったままになっている皿を見て、近づいてくる少女に言った。

「…？夕食はもう…いいのか？残しては勿体無い…。…！」

少女は、死神の腰の部分にゆっくりと腕を回した。弱々しくもそれなりにしつかりと、まるで気に入ったものを離さない子供のように。

死神は驚いた。

「どう…した？いきなり何なんだ…」

「…一人が寂しいって、改めて思っただけ」

「…泣いている…のか？」

「あなたがいて、嬉しかったの」

「嬉しい…？俺がいることが…か？」

「そう。目が覚めて、昼間のことが夢の中の出来事だと思ったから」

「そう…か。だからお前はあんなことを…言っていたのか。眠りから覚めて…寝ぼけているのかと思っていたが…食事もしていたし…様子を見ていたらお前は…俺が居なくなつたと妙なことを…言う。俺はずっとここに…いたのに」

「ごめんなさい。暗くて分からなかったの。昼間のあなたとの時間が楽しかったから…だから、一人になって…急に寂しくなつたの」

「そう…か。お前は本当に変わっている…死神の俺と一緒にいて楽しい…なんて」

少女は微笑んで涙を拭いながら、照れくさそうに言葉を並べる死神の顔を見た。ベットについているライトの光が、死神の顔を薄っすら浮かび上がらせている。死神の目はとても優しくかった。しかし、内心ではまだ疑っている部分もあって、死神は複雑な気持ちになった。それでも死神は、これから一週間この少女のそばに居ることを心に決めていた。

気持ちが納まらず、未だに抱きついていいる少女を安心させるように死神は言った。

「お前に見つかった以上、オレはお前が期日までの間に自殺でもないよう見ていなければ…ならない。だからお前が死ぬまで、俺はお前とともに居る」

その言葉が嬉しかった少女は、パツと死神のほうを見て、目を輝かせた。

「本当！？それじゃあ、たくさんお話できるね！」

「お…おはな…？な、何でオレが…そんなこと」

「だって、私はもうすぐ死ぬんでしょ？それまで一日一日を無駄にできないよ」

「おいおい…死ぬ間近になってからでは遅い…だろう。お前は今まで無駄に…生きていたのか？」

「そんなこと、勿論無いよ。病気を克服しようって、一生懸命…お父さんやお母さんより早いだろうなって思ってたから頑張ってたよ。けど死ぬ日が近いなら、なおさら無駄にできない。それに、近いといっても何時死ぬか教えてくれないんでしょ？」

「ああ…死ぬ2日前になつたら…教えてやる。それにしてもお前早く死にたいんじゃないのか？」

本音だった部分を言われて、少女は少し大人しくなった。

「うん…あなたと話すまではそう思ってたよ。けど…」

目線を下に落としてつつ、少女は静かに言った。

「やっぱり、早く死にたいなんて、思っちゃダメ。たとえ明日が命日でも、それまで精一杯、何かをやり遂げるために何かしなきゃダメなんだって、思ったから」

「…！」

「なんてね」

「え…？」

「本当はまだ、”早く早く”って思ってるの。けど、何かしたいって思ったのも本当」

それを聞いて、今度は死神が微笑んだ。少女のその気持ちが、死神は嬉しいと感じた。

「そう…か。ところでその…そろそろ放れて…くれないか？こんなことは初めてで…どうしてやれば良いのか…分からない」

「あ、ごめんなさい…本当に嬉しくて嬉しくて、気持ちが抑えられなかったの」

死神から放れた少女は、明日があるからとベットに戻った。寝息をたてはじめた少女の枕元に立った死神は、少女に抱きつかれたときのことを思い返していた。

「（この娘と一緒にいると…なんだか懐かしいような気持ちに…なる。遠い…いつかの記憶が思い出されてくる…ようだ）」

部屋が暗くて見えなかったため少女は気づかなかったが、死神は少し赤面していた。それは死神とは思えないような、人間らしい反応だった。

死神は、それから東の空が明るくなるまで物思いに耽^{ふけ}っていた。

少女と死神の不思議な一週間が始まろうとしていた。

1＊死神と少女＊（後書き）

まったりしていただけたでしょうか？（笑）続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8183d/>

律儀な死神

2010年10月10日01時19分発行